



# 新役員への抱負

## 福岡大学メディカル ゾーンの発展

運営協議員  
三好 萬佐行



十二月中旬、医学部から運  
出された運営協議員(評議  
員)の委嘱を受けた。法人福  
岡大学の予算・決算、人事、  
規定の制定や改正など運営全  
般に亘っての審議に参加する  
ことになる。あくまで福岡大  
学の全般的円滑な運営につい  
てであるが、その中であつ  
て、医学部、両病院および看  
護学校というメディカルゾ  
ンでの具体的な運営事項の審議  
に当ることになるのは当然で  
ある。しかし、過去に運営協  
議員および医学部長であった  
経験から、運営協議員自身が  
新たな議題を提議することは  
ない。メディカルゾーンの具  
体的意向は医学部長、各病院  
長および看護学校長からの提  
案事項として審議される。尤  
も、運営協議員に提案される  
までには大学の役職者間での  
討議や役職会議を通して充分  
に審議されている。実行する  
上での余程の困難や大学規定  
から見て理不尽な点でも指摘  
されない限り、協議会で反対  
が生ずることはない。

医学部・病院が抱えている  
問題は極めて多い。それらは  
医学部の発足以来の課題であ  
ったものもあれば、移行行く  
時代のニーズとしてクローズ  
アップされたものも多い。既  
に緊急な具体的問題としては  
①医学教育カリキュラムとそ  
の実行方法  
②看護学科の増設  
③診療科目の増加と充実(例

えは内科系診療科や形成外  
科など)

④臓器別診療科と診療のセ  
ンター方式化  
⑤筑紫病院のハード、ソフト  
両面の拡充  
など、枚挙にきりがない。

これらは学報にも見られる  
基本計画委員会の提言を大学  
運営に反映させるべく検討し  
ながら、メディカルゾーンの  
問題点の解決を期さねばなら  
ない。医学部・病院の多くの  
方々の率直なご意見を折ある  
毎に聞かせていただきたい。

## これからの新しい 医学部カリキュラム に向かって

教務委員  
吉田 稔



教務委員になってまだ一カ  
月足らずである。教務として  
の日常的な仕事だけでも大変  
であるとは考えていたが、新  
しい医学部カリキュラムの骨  
組み作りなど多くの課題を抱  
え、大変な時に教務委員を仰  
せよったような気がする。

平成三年二月の大学審議会  
による「大学教育の改善につ  
いて」の答申にはじまり、大  
学設置基準の大綱化が省令と  
して出された。それに従い、  
福岡大学医学部でもカリキュ  
ラムの手直しが進められ、週  
五日制の実施、講義時間の短  
縮、M5、M6でのカリキュ  
ラムの一部変更、M5学年末  
での「BSL総合試験」の取  
り入れなど若干の変更が加え  
られた。

しかし、基本的に最も大き  
な点は、一般教育科目、専門

M6での総括講義、各教科  
験のあり方、国試模試の時期  
の問題などについても検討す  
る必要があるのではないかと  
思う。

この他、学生生活全般と大  
きく関わる組担任、副担任制  
(チューター制)の評価、見  
直しなど、他にまだまだ多く  
の問題が山積していると思  
うが、現実的には何とどう  
も、医師国家試験を目前に  
してM6でのカリキュラムの  
再検討が急を要するものであ  
ろう。

これからの新しい医学部カ  
リキュラムの編成を目指し、  
本年度は二回の医学部ワー  
クショップも計画されている  
が、カリキュラム検討小委員  
会、医学部教務委員会、教授  
会で十分な審議、検討がなさ  
れ、少しでも良いものが出来  
上がる事を期待したい。

これには大変な努力と、時  
には思い切った発想の転換も  
必要と思うが、医学部教務委  
員としても相応の御手合いが  
出来ればと考えている。

## 現状の再認識から

学生部委員  
黒木 政秀



この度、医学部の学生部委  
員を担当することになりました。  
善かれ悪しかれ、事が起  
きてからの認識や対応ではい  
けないと、学生部委員の仕事  
について確認しました。唯一  
大学の「学生部委員会規定」  
に、委員会は学生の補導厚生  
に関する重要な事項を審議  
し、かつ学生課及び厚生課の  
所管事項の実施に関し方針を  
与えることとあり、そこで関係  
する所管事項を捜すと、「学生  
必修」に、学生課は学生生活  
の全般的な相談に応じ、本学  
が教育の一環として推奨する  
課外活動の指導にあたる。そ  
の他、学生主催行事の指導、

出席調査、賞罰関係、生活実  
態調査、...とあり、また厚  
生課は、学生生活の福利厚生  
面および経済的諸問題につ  
いて、できる限りの相談、援  
助に際する。主に、奨学金関  
係、保険関係、...とありま  
す。ひとことで言えば、学生  
生活を充実させるための、教  
務以外の仕事全般の方針決  
定、となるのでしょうか。所  
管事項の実施は実際にはその  
多くを事務の方々に対処し  
ていただくのですが、認識し  
ていた以上の責任の重大さを痛  
感しております。医学部では  
その上、教務委員会への出席  
が義務付けられております。  
医学部ないし教務サイドの方  
針を的確に学生側に伝えるの  
は勿論、学生側の問題意識や  
言い分も十二分に医学部ない  
し教務サイドへ伝えられれば  
と考えております。

「存知の通り、平成五年は、  
三月の第87回医師国家試験に  
おける新卒の合格率が約七二  
%（二十七人中合格九十一名）  
で全国最低（八十九位）、うち  
私立二十九校、また夏の西  
医士の成績も四十四校中最低  
位でした。学生部委員として  
は、クラブ活動等の充実をま  
ず訴えたいのですが、医学生  
の本業が医師になるための勉  
学である以上、この国試結果  
を抜きにしては何事も語れま  
せん。この結果は、安易な進  
級・卒業では国試合格はない  
という福岡大学の現状認識  
を求めています。学生も教員  
もより動かざるを得ないよう  
な教務関係の改善・改革は、  
教務サイドにお任せするとし  
て、学生側が勉学に臨む姿勢  
について、二人の先輩の本紙  
の記事を改めて紹介し、お願  
いしておきます。改めてと書  
いたのは、これらの記事を目に  
して、これら諸君が極めて  
多いことを知ったからです。

まず前学生部委員の宮内教授  
が第26号に、「医学部学生へ  
のアドバイス」として一学  
園内の時間、とくに聴講を大  
切にとの内容を書かれました。  
た。もう一つは、前教務委員

の満留教授が第22号に、「最  
近の福大医学を語る」とし  
て一口をあげて知識を与えら  
れるひなどり型学習からの脱  
皮、とくにベッドサイドでは  
自主的学習態度を一と訴えて  
おられます。いずれも多くの  
教員が共感し、常日頃訴えて  
いることでもあります。本館  
一階の学生控室に掲示します  
ので、よく読んで参考にし  
てください。

学生サイドから  
手元に第五回私立医科大学  
・医学部学生生活実態調査  
(平成二年十月)の福大医学  
部関係があります。一年から  
六年生までの六七一名中五四  
二名(八二%)の回答結果で  
す。広範囲に及ぶ実態調査  
ですが、学生サイドからのシ  
グナルとして二・三紹介しま  
す。まず講義について、約二  
九%の学生が講義に不満を持  
っており、その内五八%がカ  
リキュラムが強制的で無理、  
かつ五五%が一方的な授業で  
分りにくい、と答えており  
ます。次に医学部へ対して、  
三〇%が教務スタッフの充実  
を希望し、これは高学年ほど  
高く、五年で三六%、六年生  
では五〇%です。一方教師に  
対しては、講義内容の充実四  
八%、個人的接触・対話の希  
望三四%となっています。悩  
みは、六二%が有りとし、う  
ち四三%が医師に適性が不  
安、三四%が勉学に対する不  
安、三四%が卒業後の専門分  
野の選択に、また三三%が留年  
に對し不安、と訴えておりま  
す。

この再検討は施設面だけでな  
く、運営組織の改革も必要に  
なってくるでしょう。これか  
らの情報センターとは、どの  
ような機能を備えたら良いの  
か考えてみますと、現代は高  
度情報化社会と呼ばれ、産業  
分野のみならず、大学も含め  
た色々な分野にまで情報化の  
波がおしよせています。基礎  
医学ないし、臨床医学におい  
ても膨大な情報が提供されて  
いるのが昨今です。我々にと  
っては、氾濫した多くの情報  
のなかから、必要な情報を必  
要な時にいかなる手段を用い  
て、すばやく取り出して利用  
できるかが鍵となるでしょう。  
情報センターの図書部門  
では、前図書委員の岩崎教授  
の御努力で論文情報検索用と  
してCD-ROMを利用出来  
る設備が設置されて、数多く  
の人が利用しています。今後  
この検索システムを各教室か  
ら利用できる設備が構築され  
ます。さらに本年後期になり  
ますと、学内通信網が付設さ  
れる予定になっています。こ  
の通信網が完成しますと、パ  
ーソナルコンピュータを使っ  
て自分の机上から電子メール  
で、国内外への情報の発信、  
受信が簡単にできるようにな  
ります。このようなシステム  
環境を考慮しますと、図書情  
報が印刷という手段を用いた  
情報ですが、情報の蓄積容量  
に問題がありますので、将来  
的には情報記録メディア(媒  
体の変化が起ころう)でしょう。  
現在でも図書、雑誌などの展  
示スペースが問題になるよう  
ですので、今後将来をにら  
んだハードウェア、ソフトウ  
ェアを含めた情報センターの再  
構築を検討する時期がきてい  
るのではないのでしょうか。

## 図書委員 にあたって

図書委員  
坂本 康二

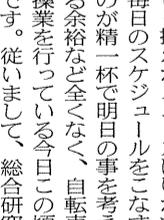


今回はからず図書委員に  
選出されて、少々とまどいを  
感じているところで、しか  
しもうも言っているれない時  
期になり、任務を遂行しな  
ければならないと思っ  
ている今日この頃です。そ  
この頃です。そこでこの機  
会に情報センターの機能につ  
いて、常日頃考えていたこと  
について述べてみたいと思  
います。まずこのセンターは昭  
和五十九年に、当時の医学部  
図書館が狭くなり、図書部門、  
視聴覚教育部門、医学資料展  
示部門ならびに研修室などを  
含んだものとして建設されま  
した。建設以来十年を経過し  
て、現代の情報化時代に照ら  
すと、情報センターとしての  
機能が十分に果たせない状  
況になっていると思っ  
ています。過去十年間の情報  
機器の発達にはめざましいも  
のがあり、さらに情報記録の  
メディア(媒体)の磁気ディ  
スク化、光ディスク化などに  
より、膨大な情報量が処理さ  
れるようになりました。例え  
ば、画像情報も蓄積が可能と  
なった結果、コンピュータ処  
理が出来るようになってきて  
います。最近では、教育、研  
究では勿論のこと、臨床での  
診断、治療の面でコンピ  
ュータを利用した情報処理が盛  
んに行われています。このよう  
な環境に対処するために、現  
在の情報センターの機能は、  
必然的に再検討されなければ  
ならない時期にきています。

この再検討は施設面だけでな  
く、運営組織の改革も必要に  
なってくるでしょう。これか  
らの情報センターとは、どの  
ような機能を備えたら良いの  
か考えてみますと、現代は高  
度情報化社会と呼ばれ、産業  
分野のみならず、大学も含め  
た色々な分野にまで情報化の  
波がおしよせています。基礎  
医学ないし、臨床医学におい  
ても膨大な情報が提供されて  
いるのが昨今です。我々にと  
っては、氾濫した多くの情報  
のなかから、必要な情報を必  
要な時にいかなる手段を用い  
て、すばやく取り出して利用  
できるかが鍵となるでしょう。  
情報センターの図書部門  
では、前図書委員の岩崎教授  
の御努力で論文情報検索用と  
してCD-ROMを利用出来  
る設備が設置されて、数多く  
の人が利用しています。今後  
この検索システムを各教室か  
ら利用できる設備が構築され  
ます。さらに本年後期になり  
ますと、学内通信網が付設さ  
れる予定になっています。こ  
の通信網が完成しますと、パ  
ーソナルコンピュータを使っ  
て自分の机上から電子メール  
で、国内外への情報の発信、  
受信が簡単にできるようにな  
ります。このようなシステム  
環境を考慮しますと、図書情  
報が印刷という手段を用いた  
情報ですが、情報の蓄積容量  
に問題がありますので、将来  
的には情報記録メディア(媒  
体の変化が起ころう)でしょう。  
現在でも図書、雑誌などの展  
示スペースが問題になるよう  
ですので、今後将来をにら  
んだハードウェア、ソフトウ  
ェアを含めた情報センターの再  
構築を検討する時期がきてい  
るのではないのでしょうか。

## 総合研究所 にあたって

総合研究所委員  
柏村 征一



この場を借りまして、総合  
研究所委員の任務を簡単に  
述べさせていただきます。先  
ず、年四回の医学紀要の刊  
行、次に年一回の医学会ニ  
ュース、年一回の年報の作成、  
専門委員会協議会の構成員で  
あることから生命科学系専門  
委員会設置の取りまとめ、総  
合科学部門の一千万円プロジ  
ェクトの取りまとめ及びその  
選考、公開講座委員会の構成  
員であることから公開講座の  
プロモート、総合研究所主催  
の研究会の取りまとめ、そし  
て昨年から発足した医学紀要  
優秀論文賞受賞者の選考など  
です。

医学紀要に関しては、  
歴代の総合研究所委員及び小  
委員会の委員各位の御努力に  
より毎号立派な雑誌が刊行さ  
れておりますが、その陰では  
論文の査読、編集、そして校  
正と並々ならぬ御苦労の結果  
であることを忘れてはなりま  
せん。このような御苦労を少  
しも緩和するために、投稿

なされる方及び指導教授各位の  
格段の御協力を賜りたいと存  
じます。投稿なされる方は投稿  
規定をよく御参照の上、これ  
を遵守して下さい。また、必  
ず指導教授に論文を校閲して  
いただいた合格したもののみ  
論文を読み流さないで、自分  
の論文のつもりで推敲して下  
さい。特に英文論文のチェッ  
クを厳重にして下さい。和文  
論文では英文アブストラクト  
に手抜きが多いようですので  
で、充分目を通して載ります  
ようお願い申し上げます。

総合研究所のものにつ  
きましては、現状のままでは研  
究所の名はついていても実態  
は研究所ではないとの批判が  
あり、研究所所長をはじめ研  
究所委員の中にも、抜本的な  
研究所の機構改革が必要であ  
るとの認識があります。そこ  
で現在、壮大な総合研究所の  
将来構想計画が練られつつあ  
ります。具体的にはこれから  
徐々に明らかになってくる  
と思います。

最後に重ねて皆様方の御協  
力と御支援を心からお願  
い申し上げます。

福岡大学医学紀要  
第20巻優秀論文賞  
決定！  
以下の方々が、福岡大  
学医学紀要優秀論文賞を  
受賞し、平成六年二月一  
日(火)に開催された福  
岡大学医学会第30回例会  
で表彰されました。  
レジーナ マリア  
真智恵 安永  
(公衆衛生学)  
論文名 「Sao Paulo  
州の死亡構造—日本の  
比較—」  
江口 冬樹  
(産婦人科学)  
論文名 「Polymere-  
se Chain Reaction  
(PCR)法による Hu-  
man Papilloma-  
virus (HPV) DNA  
検出—子宮頸部擦過細胞  
を用いて—」

# 自己紹介

平成五年五月以降に昇格又は就任

臨床検査医学教授

小野 順子



昭和四十二年九州大学医学部卒業後、九州大学第一内科、大分医科大学第一内科、福岡大学第一内科第一内分分泌糖尿病の診療に従事する傍ら、組織培養を用いた膵島ホルモン分泌機構の解析、糖尿病治療に

BSLで毎週学生さんと話す機会がありますが、診断のプロセスを単に知識として覚

おける実験的膵島移植等の研究を行ってきました。平成三年筑紫病院内科の発足に伴い、代謝内分分泌及び内科一般の第一線の診療に従事する機会を得ました。昨年十月より七限に戻りまして、内科第一勤務当時の懐かしい先生方のお顔を拝し嬉しく存じます。臨床検査医学は、診断部門であり、最新のテクノロジーを診療に応用すべく、基礎と臨床の橋渡しができればと思います。

耳鼻咽喉科学助教授

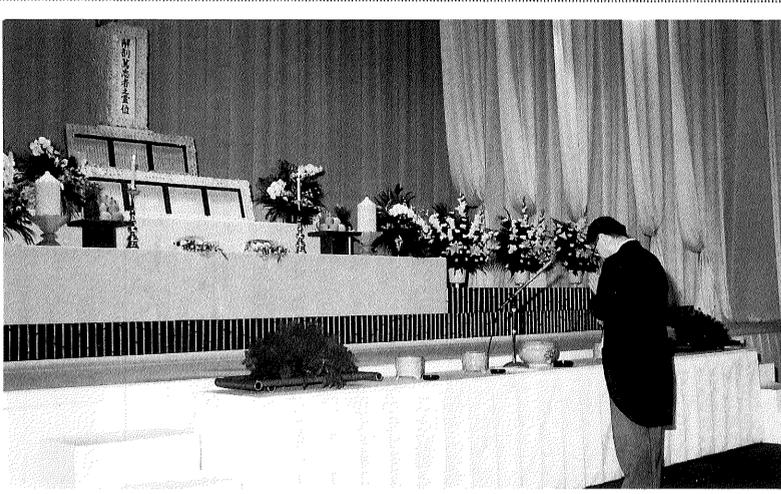
森園 哲夫



## 第二十回 医学部慰霊祭

第二十回福岡大学医学部解剖体慰霊祭は、御遺族ならびに御来賓の方々、本学

職員と学生約五十名が参列し、平成五年十月二十三日(土)午後二時から福



献灯献花の後、厳粛な雰囲気につつまれて慰霊祭は進行し、福岡雄治医学部長は祭詞の中で、医学の発展のため欠くことのできない解剖にご献体頂いた霊位と

一九七八年三月福岡大学医学部第一回卒業、六月第一外科志村前教授の下に入局致しました。一九八二年六月より二年間第一病理学教授の下で消化管病理学を学びました

九州大学で七年、福岡大学で十五年間主として肺吸虫、住血吸虫に関する仕事をしました。この間これらの吸虫の調査、研究のため二年余りのケニア滞在をはじめ、中国、マレーシア、フィリピン等の国々に出かけさせていただきました。その折、日本国内では見られないが世界的にはきわめて重要な種々の寄生虫症等々苦しむ人々をこの目で見てその対策、コントロールの重要性ならびに困難さを肌で感じてきました。

昭和五十九年福岡大学医学部卒業、第二内科に入局、二年間の研修後、川浪病院の循環器部長として四年間勤務致しました。平成三年より当院臨床検査部助手として、循環機能検査に携わりました。このたび第二内科に戻り、現在は心臓カテーテルや心臓電気生理検査などに従事しています。出張時代に慢性心房細動の電気生理学的特性に関する臨床研究を行い、この論文で学位を戴きました。現在も心房細動をテーマとし、電気生理検査による重症度、薬効評価に関する研究を行っています。最近頻脈性不整脈に対する薬物による新治療法としてカテーテルアブレーション(焼灼術)が脚光をあびていますが、我々もWPW症候群や心室頻拍に対し施行し、良好な成績をあげています。今年4月から荒川教授の御推薦を得て、ケースウェスタンザブ大学に留学させて頂き、不整脈学をさらに深く学んできたいと思っています。今後とも御指導、御鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。

昭和五十五年福岡大学医学部卒業(三期生)。卒業直ちに部卒(三期生)。卒業直ちに未知の分野、形成外科に憧れ

昭和五十三年順天堂大学医学部卒業、同年九州大学産婦人科に入局、三年後九州大学第二病理学教室の遠城寺教授のもとに子宮内膜癌について研究させて頂きました。その後は佐賀医科大学産婦人科で七年半のあいだ杉森教授より婦人科腫瘍の臨床ならびに研究について指導を受けました。わたしは福岡大学を含めると4つの大学を渡り歩いたことになり、それぞれの大学のシステムや学生の気質の違いに接して大学の個性というものは大事であると考えようになりました。私自身は大学時代はラグビー

昭和五十五年福岡大学医学部卒業後、放射線医学教室に入局致しました。以後、岡

まだまだ未熟で皆様方に御迷惑をおかけ致しておりますが、今後とも御指導を賜りますようお願い申し上げます。

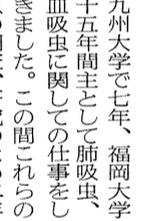
筑紫病院外科助教授

二見喜太郎



寄生虫学講師

波部 重久



内科第二講師

熊谷浩一郎



昭和五十九年福岡大学医学部卒業、第二内科に入局、二年間の研修後、川浪病院の循環器部長として四年間勤務致しました。平成三年より当院臨床検査部助手として、循環機能検査に携わりました。このたび第二内科に戻り、現在は心臓カテーテルや心臓電気生理検査などに従事しています。出張時代に慢性心房細動の電気生理学的特性に関する臨床研究を行い、この論文で学位を戴きました。現在も心房細動をテーマとし、電気生理検査による重症度、薬効評価に関する研究を行っています。最近頻脈性不整脈に対する薬物による新治療法としてカテーテルアブレーション(焼灼術)が脚光をあびていますが、我々もWPW症候群や心室頻拍に対し施行し、良好な成績をあげています。今年4月から荒川教授の御推薦を得て、ケースウェスタンザブ大学に留学させて頂き、不整脈学をさらに深く学んできたいと思っています。今後とも御指導、御鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。

昭和五十五年福岡大学医学部卒業(三期生)。卒業直ちに未知の分野、形成外科に憧れ

昭和五十三年順天堂大学医学部卒業、同年九州大学産婦人科に入局、三年後九州大学第二病理学教室の遠城寺教授のもとに子宮内膜癌について研究させて頂きました。その後は佐賀医科大学産婦人科で七年半のあいだ杉森教授より婦人科腫瘍の臨床ならびに研究について指導を受けました。わたしは福岡大学を含めると4つの大学を渡り歩いたことになり、それぞれの大学のシステムや学生の気質の違いに接して大学の個性というものは大事であると考えようになりました。私自身は大学時代はラグビー

昭和五十五年福岡大学医学部卒業後、放射線医学教室に入局致しました。以後、岡

まだまだ未熟で皆様方に御迷惑をおかけ致しておりますが、今後とも御指導を賜りますようお願い申し上げます。

整形外科講師

大慈彌裕之



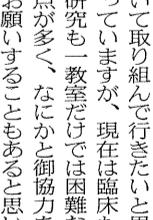
産婦人科講師

蜂須賀 徹



放射線部講師

小金丸史隆



## 福岡大学医学会総会・例会の報告

日時 平成五年七月二十九日(木) 午後三時より  
場所 福岡大学医学部臨床大講堂

第16回総会

議事

- 1、報告事項
- 2、役員改選
- 3、平成四年度会計報告ならびに平成五年度予算(案)

第29回例会

講演

- 1、座長 朝長 正道 教授  
「福岡大病院救命救急センターの現況」  
救命救急センター 田中 經一 教授
- 2、座長 柏村 征一 教授  
「グラスゴー大学留学紀行」  
スコットランドの自然と心」  
法 医 学 影 浦 光 義 助 教 授
- 3、座長 荒川規矩男 教授  
「大動脈弁輪拡張症の外科治療」  
心臓血管外科 木村 道生 教授

に明け暮れ苦しい毎日でしたが、今は楽しく思い出されま

す。医師としては今後も婦人科腫瘍の臨床ならびに研究につ

いて取り組んでいきたいと思

っています。現在は臨床も

研究も一教室だけでは困難な

点が多く、なにかと御協力を

お願いすることもありますが、

よろしく御指導のほど

お願いいたします。

近年の各種画像診断機器の

進歩で、我々放射線科医は、

仕事分担の多様化かつ多忙と

なりつつありますが、診断の

基本は、単純X線像という理

念のもとに画像を撮影して

おります。

まだまだ未熟で皆様方に御

迷惑をおかけ致しております

が、今後とも御指導を賜りま

すようお願い申し上げます。

御米転

おめいじつじつがす！

新潟に赴任して

新潟大学歯学部 口腔生化学教授 織田 公光



平成五年の二月一日付けで新潟大学歯学部の口腔生化学に赴任することになり、冬の新潟市の足踏み入...

教室紹介

福岡大学健康管理学

当教室は昭和五十三年四月に開設されました。井上幹夫教授のもとに現在、鈴木九五教授、守田一助教授、中村豊講師、蔵本裕一併任講師、宗清正紀併任講師以下助手三名、医員十五名(うち学外出向中十一名、研修医十三名)...

「試作第一号」近況報告

島根医科大学医学部 法医学教授 木村恒二郎

昭和五十七年に福大医学部を第五回生として卒業し、法医学教室に入局。昭和六十年に九大法医学教室へ移り、平成五年四月から島根県は、出雲市にある島根医科大学で研究生活を送っております。...



リサーチビジターの横顔

横顔

薬理学 帕尔哈提



私は中国政府派遣の留学生として八五年九月から九十年三月まで福大で医学博士の学位を取得して帰国しました。...

内科学第一 王 薇薇



私は王薇薇と申します。一九八三年北京医科大学を卒業した、北京医科大学第一病院神経内科の医師です。...

内科学第二 韓 華



中国吉林省长春市からやってきました韓華です。長春市中心病院の心血管内科で研修していましたが、日本の進歩した医療機器を用いて循環器疾患の研究を行いたいと考えて、中国との交流が深い九州の福岡大学にアプライしました。...

小児科学 洪 成慧



私は中国長春市鉄道部第十三局中心医院小児科の医師で、洪成慧と申します。六年間の臨床実践の中で、日本の進んだ医学を勉強する必要を感じて、昨年十月から福大医学部小児科の研究員になりました。...

歯科口腔外科学 俣 明憲



私は中国上海市日赤病院の外科から参りました。年齢は三十九歳です。一九七九年、上海医科大学医療系を卒業、同年、上海市日赤病院外科に入局した外科医です。...

外科学第二 鍾 翠平



上海医科大学組織胚胎教室で勤めている私は、授業の外、主に肝実質細胞と類洞壁細胞の培養および種々な因子による影響で、肝免疫機能変化的作用機序について研究をやっています。...

精神医学 王 晓峰



私は一九九二年十二月中国内蒙古から来ました。去年十月に福岡大学精神医学教室の西園教授からお世話を受けたので、研究室に入学して研究の発達のために努力いたします。...

内科学第一 孟 晶



私は九二年七月より、中国で春城として知られている雲南省昆明市から第一内科内分秘研究室に留学しております。七月当初は、あまり分らない日本語で苦労しましたが、研究を進めながら日本語も勉強し続け、漸く落ち着いて生活できるようになりました。...



この欄、五頁下段へ続く

# 海外便り

## 「アイオワより」

八尋眞一郎

アイオワに来てから二カ月が過ぎました。今回原稿の依頼を受けました。大学についてこの町についてもよく把握してあげたい。そこでこれまで感じたことをエピソードを交えて書いてみたいと思います。

「大学およびアイオワ市」  
私のお世話になっているアイオワ大学はアメリカ中央にあるアイオワ州のアイオワ市にある州立の総合大学で、それなりの歴史(百年以上)とそれなりの評価(ある雑誌のランキングによると総合評価で五十位から百位の間)を誇っております。キャンパスはとても広く、大学の構内で野ウサギやリスが飛び跳ねているのは最初びっくり致しました。アイオワ市は大学以外これといったものがなく、大学町というよい感じではないでしょうか?

「2nd DNA」  
私、今までの言葉にたいへん悩まされておりました。そう、なかなか合点がつかないかなかったです。ラボミーティングで、徹底的に討論され、失敗の原因について追求されました。皆よく働き、よく討論し、かつよく冗談をいいます。こういう雰囲気は大好きです。先日、ブラッド(同僚)の誕生日で昼食に皆でピザを食べました。しかし本人が来ていないのに食べました。アイオワ市は大学にはどうも意味があったのでも見ることができないような

「車について」  
バトラー教授(私のお世話になっているバイロロジの教授)はポロポロのベントに乗っています。日本ではとても見ることのできないような膜疾患、顎関節症、顎変形症、顎・顔面外傷、嚥食物性疾患、良性腫瘍、顎・顔面欠損による審美・機能障害に対する補綴、口腔の不定愁訴、有病者の歯科治療などを行っております。当科治療の特徴として咀嚼指導があげられます。咀嚼指導は顎関節症に有効であり、同時に消化器系や疲労・倦怠、心身面における全身的不安定感やライフスタイルの改善などの全人的効果がみられます。

「車について」  
バトラー教授(私のお世話になっているバイロロジの教授)はポロポロのベントに乗っています。日本ではとても見ることのできないような膜疾患、顎関節症、顎変形症、顎・顔面外傷、嚥食物性疾患、良性腫瘍、顎・顔面欠損による審美・機能障害に対する補綴、口腔の不定愁訴、有病者の歯科治療などを行っております。当科治療の特徴として咀嚼指導があげられます。咀嚼指導は顎関節症に有効であり、同時に消化器系や疲労・倦怠、心身面における全身的不安定感やライフスタイルの改善などの全人的効果がみられます。

「車について」  
バトラー教授(私のお世話になっているバイロロジの教授)はポロポロのベントに乗っています。日本ではとても見ることのできないような膜疾患、顎関節症、顎変形症、顎・顔面外傷、嚥食物性疾患、良性腫瘍、顎・顔面欠損による審美・機能障害に対する補綴、口腔の不定愁訴、有病者の歯科治療などを行っております。当科治療の特徴として咀嚼指導があげられます。咀嚼指導は顎関節症に有効であり、同時に消化器系や疲労・倦怠、心身面における全身的不安定感やライフスタイルの改善などの全人的効果がみられます。

「チェイン教授」  
仕事の都合上、生物学部にもよく行くので、教授室の前室のドアに色々な名前が貼ってあるのですね。ペイン、チェイン、ジョージ、ア・ケイン、そう、自分あてに来た手紙の誤ったあて名を貼ってあるのです。ちなみに、この方はジョージ・ケインです。私、こういうユーモアが好きです。

「親心・子心(10)」  
医学部五年生 堀内新司  
そういつこともありBSLでの事について少し述べたいと思う。学生としてのBSLの目的というのは、まず第一に四年までに学んだ知識の総整理であり、実際に目で見て知識を確実にすることであると思う。又、患者さんと接すること、重要なことである。だが、四年までの学習内容では試験のためだけの学習という過言ではなく、試験が終わるとほとんど知識がなくなるという状況がやってくる。その状況では、知識の総整理どころではなく、一からの出発となってしまふ。それを極力回避すべく土日に予習をするよう私は心掛けてはいるが、週にそれではできないこともあり、そのため先生方を落胆させてしまっていることも多い。そういうことは私だけの話ではなく、学生のほとんどにいえることだ。「子心」としても深く反省すべきであると思う。

# 教室紹介

## 福岡大学歯科口腔外科学

当科は昭和四十六年九月二十五日、福大暫定病院として開設された香椎病院歯科口腔外科から発足しました。昭和四十八年八月、現在の七隈に新築された福岡大学病院に移転しました。昭和五十八年四月一日、これまでの都温彦助教授が医学部歯科口腔外科学講座の初代教授に就任しました。教育の面では医学部四年次に講義、五年次にBSLを担当しています。講義や実習内容は、口腔解剖や生理、歯の疾患、炎症、歯・顎顔面外傷、口腔粘膜疾患、顎関節疾患、嚥食物性疾患、唾液や味覚などの他、

研究は痛み、顎関節症、咀嚼と全身の健康との関係、嚥食物性と呼吸器感染症、心身症などを中心に行っています。診療は一般歯科、口腔粘

最後にになりましたが、留学を許可して下さい。木船教授、貴重な助言、暖かい激励を下さった寄生虫学・微生物学教室の方々に感謝します。

「車について」  
バトラー教授(私のお世話になっているバイロロジの教授)はポロポロのベントに乗っています。日本ではとても見ることのできないような膜疾患、顎関節症、顎変形症、顎・顔面外傷、嚥食物性疾患、良性腫瘍、顎・顔面欠損による審美・機能障害に対する補綴、口腔の不定愁訴、有病者の歯科治療などを行っております。当科治療の特徴として咀嚼指導があげられます。咀嚼指導は顎関節症に有効であり、同時に消化器系や疲労・倦怠、心身面における全身的不安定感やライフスタイルの改善などの全人的効果がみられます。

「車について」  
バトラー教授(私のお世話になっているバイロロジの教授)はポロポロのベントに乗っています。日本ではとても見ることのできないような膜疾患、顎関節症、顎変形症、顎・顔面外傷、嚥食物性疾患、良性腫瘍、顎・顔面欠損による審美・機能障害に対する補綴、口腔の不定愁訴、有病者の歯科治療などを行っております。当科治療の特徴として咀嚼指導があげられます。咀嚼指導は顎関節症に有効であり、同時に消化器系や疲労・倦怠、心身面における全身的不安定感やライフスタイルの改善などの全人的効果がみられます。



アイオワ市、大学の象徴 オールドキャピタル



ラボミーティングの後。前列の典型的アイオワが教授、その後がプレアイオワの私



医学部五年生 堀内新司

I'm a Chinese. My name is Zhou Qi. I came from Sichuan province — in the South-west of China. In China, I worked in the Nuclear Technology Department of the Sichuan Institute of Labour Health and Occupation Disease. I was engaged in analysis of biochemistry. I graduated from Chemistry Department of Sichuan University in 1990.



内科学第二 周琦

I came to Japan on April, 1993. From then, under the leading of Prof. Arakawa I began to work with Dr. Ideishi in research of "Role of Kinin-tensin system in the Cardiovascular system" in the Second Department of Internal Medicine of Fukuoka University. There are many unknown and new knowledge in my work, so I must work hard to study. But I believe that I can do my best to learn and master these advanced science and technology with the help of Dr. Ideishi during stay in Japan.

These days in Japan, I am very appreciated my Japanese colleagues — ladies in 二内1研. They are so kind, friendly and help me at all times. I feel warm and happy with them.

At last, please accept my whole-hearted greetings. Thank you.

Thanks for giving me an opportunity here to express myself. After graduated from Suzhou Medical College, Suzhou China in 1984, I have been a teacher and researcher of Pathology in the same college. In 1991, I passed the examination for Sasagawa (笹川) Medical Scholarship and became a member of the 13th term.



病理学第一 Liu Qiang

On October 1 of last year I came to Fukuoka University and under the direction of Professor Kikuchi and Dr. Ohshima of Pathology First began to learn the diagnosis of malignancy from lymphoreticular tissues. Meantime I also began to do some investigation of lymphoma with molecular techniques like PCR and in situ hybridization. Obviously it took me a hard time to get accustomed to the surrounding situation, Japanese especially. For one year is not a long time and there is much for me to learn, I am determined to do my best here. Wish you a good time.

Thanks.

(四頁より続く)

# 教室 便り

## 学位取得

次の方は、平成五年十二月十二日付で、福岡大学より医学博士を授与された。

- 藤光 和宏(病理学第二) 論文名「Porcine vascular smooth muscle cells immortalized with SV40 ori-defective DNA: Characteristics of cell growth and collagen synthesis」
- 王 恒治(内科学第一) 論文名「超音波内視鏡による胃腸深部診断に関する研究—その有用性と問題点—」
- 古川 浩(内科学第一) 論文名「Long-term risk factors for bleeding after first course of endoscopic injection sclerotherapy: A univariate and multivariate analysis」
- 中山 義也(脳神経外科) 論文名「ヒト神経腫瘍及び髄膜腫における血小板由来血管内皮細胞増殖因子(PD-ECGF)の免疫組織化学的局在」

## 海外留学

- ①研修先②目的③期間  
桂木 猛(薬理学) ①英国、ロンドン大学解剖学および発達生物学教室②単離および培養平滑筋細胞を用いたATP遊離機構の研究③平成五年七月十八日～十月十五日 八週(寄生虫学)
- ①米国・ブイオウ医科大学②犬蛔虫の免疫③平成五年十月一日～平成六年九月三十日 日本 正昭(脳神経外科) ①米国、テキサス大学②脳神経外科③平成五年七月～平成六年六月 高岸 宏(整形外科)
- ①米国、University of California, Los Angeles, Department of Orthopaedic, School of Medicine, Center for the Health Science of Medicine, Center for the Health Science of Medicine, Center for the Health Science of Medicine ②膝、股関節の total arthroplasty ③平成五年七月～十一月 加藤 寿彦(耳鼻咽喉科)
- ①オーストラリア、シドニー大学②内耳移植に関する研究③平成五年十月十三日～平成六年一月十二日 祐治(筑紫病院泌尿器科)

留学者または海外から本学への留学者はしきのとおり。

- ④病理学第一教室  
王 薇薇 ①中国、北京医科大学第一付属病院神経内科講師②脳血管障害の病態生理学的研究③平成五年五月一日～平成六年四月三十日④内科学第一教室
- 韓 華 (Han Hua) ①中国、長春市中心病院医師②循環器疾患の臨床研究③平成五年五月一日～平成六年四月三十日④内科学第二教室
- 曾 青 (Zeng Qing) ①中国、The First Teaching Hospital Beijing Medical University (Assistant Professor) ②「リボ蛋白異常症の遺伝子解析」の研究③平成五年七月八日～(一年間)④内科学第二教室
- 王 曉峰 ①中国、Chifengshifuyuanjunren 精神病院主治医師②精神医学の勉強③平成五年十月一日～平成七年四月 精神医学教室
- 洪 成慧 (Hong Chenghui) ①中国、長春市鉄道部第13局中心医院主治医師②小児感染症および呼吸器疾患の臨床的研究③平成五年十月一日～平成六年九月三十日④小児科学教室
- 何 偉 (HE WEI) ①中国医科大学第三附属病院医師②網膜・硝子体疾患の臨床研究③平成五年七月二十二日～平成六年七月二十一日④眼科学教室
- 喜多山昇、立石カミ子、松岡雄治(生化学第一)他①消化管ホルモンⅡ、「カルバコール刺激による膵癌細胞株(QGP-1N)からの Pancreastatin (PST) 及び Chromogranin A (CGA) の分泌機構の検討」(分担論文)②医学図書出版③一九九三④一九九三⑤一九九三⑥一九九三⑦一九九三⑧一九九三⑨一九九三⑩一九九三⑪一九九三⑫一九九三⑬一九九三⑭一九九三⑮一九九三⑯一九九三⑰一九九三⑱一九九三⑲一九九三⑳一九九三㉑一九九三㉒一九九三㉓一九九三㉔一九九三㉕一九九三㉖一九九三㉗一九九三㉘一九九三㉙一九九三㉚一九九三㉛一九九三㉜一九九三㉝一九九三㉞一九九三㉟一九九三㊱一九九三㊲一九九三㊳一九九三㊴一九九三㊵一九九三㊶一九九三㊷一九九三㊸一九九三㊹一九九三㊺一九九三

## 受賞

朔啓二郎(内科学第二) 中国四川省華西医科大学分子生物学 客員教授(一九九三年五月より)

## リサーチビジター

①所属②目的③期間④訪問先  
劉 強 (Liu Qiang) ①中国、蘇州医学院助教授②蘇州と福岡におけるリンパ節病変の比較病理③平成五年十月一日～平成六年九月三十日

## 学術交流

平成五年五月以降の海外留

## 新刊紹介

- 福大医学会が、執筆した著書または単行本を以下に紹介する。(書名)①発行所②発行年③価格
- ▽三好萬佐行(解剖学第二) ①中枢神経解剖学 第五版(編著)②理科社③一九九三・一〇・一④三、〇〇〇円
- ▽今永一成(生理学第一) ①最新心電学(分担)②丸善株式会社③一九九三・六・三〇④五九、七四〇円
- ▽喜多山昇、立石カミ子、松岡雄治(生化学第一)他①消化管ホルモンⅡ、「カルバコール刺激による膵癌細胞株(QGP-1N)からの Pancreastatin (PST) 及び Chromogranin A (CGA) の分泌機構の検討」(分担論文)②医学図書出版③一九九三④一九九三⑤一九九三⑥一九九三⑦一九九三⑧一九九三⑨一九九三⑩一九九三⑪一九九三⑫一九九三⑬一九九三⑭一九九三⑮一九九三⑯一九九三⑰一九九三⑱一九九三⑲一九九三⑳一九九三㉑一九九三㉒一九九三㉓一九九三㉔一九九三㉕一九九三㉖一九九三㉗一九九三㉘一九九三㉙一九九三㉚一九九三㉛一九九三㉜一九九三㉝一九九三㉞一九九三㉟一九九三㊱一九九三㊲一九九三㊳一九九三㊴一九九三㊵一九九三㊶一九九三㊷一九九三㊸一九九三㊹一九九三㊺一九九三

## 来訪

- 平成5年5月以降、本学医学部または病院を訪れた外国人学者は次のとおり。①所属 ②目的 ③来訪日 ④訪問先
- 成 周皓 (Sung, Joo Ho) ①ミネソタ大学医学部神経病理学 教授 ②M2解剖学Ⅱ特別講義ならびに解剖学教室表敬訪問。特別講義“Donor bone marrow-derived monocytes immigrate to the recipient's brain and transform to resident macrophages.” ③1993. 9. 20～9. 21 ④解剖学第二教室
- 閔 乘根 (Byung-Kun Min) ①ウルサン大学 医務副総長 ②本学との合同セミナーのため来福に際し、解剖学教室表敬訪問 ③1993. 11. 2 ④解剖学第二教室
- Robert Weingart ①スイス ベルン大学生理学研究所 教授 ②心筋細胞間ギャップ結合チャネルの電気生理学的研究の共同研究 ③1993. 8. 23～9. 22 ④生理学第一教室
- Michael Lange ①St. Luke's-Roosevelt Hospital Center およびコロンビア大学医学部 助教授 ②講演「エイズ診療の実際」 ③1993. 10. 2 ④薬理学教室
- Guillermo Silva ①チリ、チリ消化器病研究所内科医師、チリ大学医学部 教授 ②消化器病学 ③1993. 10. 11～11. 5 ④内科学第一教室
- Dr. Donald G. Langsley ①Professor of Psychiatry, Northwestern University ②講演「アメリカにおける老年精神医学の今日の問題」 ③1993. 5. 17 ④精神医学教室
- Dr. Pauline Langsley ①Department of Psychiatry, Northwestern University ②講演「The Mechanism of PNH (paroxysmal nocturnal hemoglobinuria).」 ③1993. 10. 5 ④小児科学教室
- Boo Sup Oum M. D. ①釜山大学校 医科大学 眼科学教室 ②外来・病棟・手術見学 ③1993. 6. 12～6. 19 ④眼科学教室
- Fine, Stuart L, M. D. ①Department of Ophthalmology, School of Medicine, PENNSYLVANIA UNIVERSITY ②講演“Age related macular degeneration.” ③1993. 7. 10～7. 11 ④眼科学教室
- Patric C. P. Ho, M. D. ①香港中文大学医学院 外科学系 眼科学教授 ②講演“Tuatwent of Idiopathic Uaeular Hole.” ③1993. 11. 2～11. 3 ④眼科学教室
- Hasan Sayedee Khan ①National Centre for Hearing and Speech, Mohakhali, Dhaka-1212, Bangladesh (医師) ②講演「バングラディッシュにおける聴覚センターの現状」 ③1993. 10. 23 ④耳鼻咽喉科学教室
- 李 泰義 (Lee Tae-Ui) ①建國大校 医科大学 附属病院 一般外科 助教授 ②肝腫瘍の非手術的治療の研究 ③1993. 6. 28～7. 27 ④放射線医学教室
- 後藤 宏 ①カンサス大学医学部麻酔科教授 ②講演「脳虚血、脳死と脳蘇生」 ③1993. 10. 18 ④救命救急センター

- atry, Northwestern University ②講演「精神医学における社会的治療」 ③1993. 5. 17 ④精神医学教室
- Dr. Joe Yamamoto ①Professor of Psychiatry, UCLA School of Medicine ②WHO シンポジウム出席。教室20周年記念講演会講演「比較文化精神医学研究における過去・現在・未来」 WHO 協力センター開所式出席 ③1993. 10. 9～10. 10 ④精神医学教室
- Dr. Alfred Freedman ①Professor and Chairman Emeritus, Department of Pshchiatry, New York Medical College ②WHO シンポジウム、WHO 協力センター開所式出席 ③1993. 10. 9～10. 10 ④精神医学教室
- Dr. Derson Young ①湖南医学院精神病学教授 ②～④前者と同じ
- Dr. Yucun Shen ①北京医学院精神衛生研究所教授、所長 ②～④前者と同じ
- Dr. Char-Nie Chen ①香港中文大学、医学院、精神科学系、主任、教授 ②～④前者と同じ
- Dr. Ho Young lee ①Professor and Chairman, Department of Psychiatry, Ajou University ②～④前者と同じ
- S. T. Han, M. D. Ph. D. ①Regional Director, WHO Regional Office for the Western Pacific ②～④前者と同じ
- Dr. N. Shinfuku ①Regional Advise in Mental Health, WHO Regional Office for the Western Pacific ②～④前者と同じ
- Dr. N. V. K. Nair ①WHO Regional Office for the Western Pacific ②～④前者と同じ
- Dr. T. Ito ①WHO Regional Office for the Western Pacific ②～④前者と同じ
- Dr. William Davis Ratnoff ①Assistant Professor of Medicine, Emory University School of Medicine, U.S.A. ②講演“The complement membrane attack complex and rheumatoid disease.” ③1993. 9. 24 ④小児科学教室
- Dr. M. Edward Medof ①Professor, Department of Medicine and Pathology, Case Western Reserve

- 井上幹夫(健康管理学) ①消化性潰瘍の胃酸分泌抑制剤の見直し(三好秋馬編) (分担)②医薬ジャーナル社③一九九三・九・一〇④四、九四四円
- 小野順子(臨床検査医学) ①細胞培養ハンドブック(鈴木利充編) (分担)②中外医学社③一九九三・九・三〇④七、四〇〇円
- 小野順子(臨床検査医学) ①グルカゴンと関連ペプチド(奥野純一編) (分担)②田中彰(筑紫病院脳神経外科)①キセン CT による Clinical CBP Measurement (分担)②にのろん社③一九九三・九・一〇④五、〇〇〇円
- 大久保研之(臨床検査医学) ①The Band 3 Proteins: Anion Transporters, Binding Proteins and Sensitive Antigens (分担)②Elsevier ③一九九二④三九、〇五〇円
- 内藤説也(腎臓学) ①腎臓病(からだの科学増刊(越川昭三編) (分担)②日本評論社③一九九三④二、二〇〇円
- 田中彰(筑紫病院脳神経外科)①キセン CT による Clinical CBP Measurement (分担)②にのろん社③一九九三・九・一〇④五、〇〇〇円

編集後記  
今回からはからず編集を担当することになり、これが初仕事ということになり、緊張しました。しかし、前任者によりすべて御膳立てができていたおかげで割にスムーズに進行しました。それと、集の義務の殆んどすべてを担ってくれたおかげです。何もしてないのに、編集後記を書くのは、何とも面倒な感じがするので、次号からは少しはお役に立ちたいと思っております。(S.K)